

「わたしの心」

マルコの福音書 1:40～42

はじめに

イエシュアはガリラヤ地方を旅し、多くの病を癒し、悪霊を追い出し、人々に神の国について教えておられました。そんなある日、一人の病人がイエシュアのみもとにやって来ます。その病とは「ツアラアト」と呼ばれるものでした。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:40 さて、ツアラアトに冒された人がイエスのもとに来て、ひざまずいて懇願した。「お心一つで、私をきよくすることがおできになります。」

1. ツアラアト

まず「ツアラアトに冒された人がイエスのもとに来て」とあります。この「ツアラアト」とは何か…かつては「らい病、ハンセン病」とも訳されていましたが、今日では、それは誤りであり、適切な訳ではないとされています。またそもそもこれはある特定の病を指すのではなく、これに相当する具体的な病や症状が今日存在しないことから、「重い皮膚病」と訳されたりすることもあります。レビ記 14 章などを見ますと、「ツアラアト」は人の身体だけではなく衣服や家の材木、壁、石、土などにも発生することがわかります。ですからこれは単なる病ではないとされ、このように日本語に訳された聖書でも、原語であるヘブル語の発音をそのまま用いて「ツアラアト(צִרְעָת)

このツアラアトが聖書で最初に登場するのが出エジプト記 4:6 です。

【新改訳 2017】

出エジプト記

4:1 モーセは答えた。「ですが、彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むしろ、『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょう。」

4:2 【主】は彼に言われた。「あなたが手に持っているものは何か。」彼は答えた。「杖です。」

4:3 すると言われた。「それを地に投げよ。」彼はそれを地に投げた。すると、それは蛇になった。モーセはそれから身を引いた。

4:4 【主】はモーセに言われた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」彼が手を伸ばしてそれを握ると、それは手の中で杖になった。

4:5 「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】があなたに現れたことを、彼らが信じるためである。」

4:6 【主】はまた、彼に言われた。「手を懐に入れよ。」彼は手を懐に入れた。そして出した。なんと、彼の手はツアラアトに冒され、雪のようになっていた。

4:7 また主は言われた。「あなたの手をもう一度懐に入れよ。」そこで彼はもう一度、手を懐に入れた。そして懐から出した。なんと、それは再び自分の肉のようになっていた。

4:8 「たとえ彼らがあなたを信じず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしは信じるであろう。

これは神がイスラエルの民をエジプトの奴隷状態から解放するために、モーセを遣わそうとする場面です。しかしモーセは「彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むしろ、『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょう。」と言って、この役目を断ろうとします。そんなモーセに神は二つの奇蹟を行う力を授けます。一つは杖を蛇に変えるというものです。そしてもう一つがこの「ツアラアト」です。モーセが手を懐に入れるとその手は「ツアラアトに冒され、」とあります。これが聖書で最初のツアラアトです。その症状とは「雪のようにになっていた」とありますから、おそらく皮膚が白くなるというものだったようですが、その様子は決して雪のように美しいものではなく、見ただけで人を恐れさせるほどのものであったと考えられます。4:8「たとえ彼らがあなたを信じず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしは信じるであろう。」とあるように、杖を蛇に変える奇蹟を見ても信じなくても、このツアラアトの奇蹟を見せるなら、イスラエルの民は神がモーセを遣わしたことを信じるということです。このように、ツアラアトとは本来、恐れによってイスラエルに神を信じさせ、その御言葉に聞き従わせることを目的としたものであったと考えられます。つまり「ツアラアトに冒された人がイエスのもとに来て、ひざまずいて懇願した。」というこの出来事、その様子は、イスラエルの民がイエシュアのもとに集められ、ひれ伏す姿を表していると考えられ、これは終わりの日にイスラエルが回復、再建される預言を指し示していると考えられ、それはすなわちイエシュアにひれ伏す国、イエシュアを王とする王国であることが「型」として表されていると考えられます。

2. 懇願して

ちなみにこのツアラアトの人はイエシュアに「懇願して」とありますが、ここにはヘブル語のバーラフ(ברך)「祝福する」という意味の動詞が使われているので、イエシュアを「祝福して求めた」とも訳すことができます。これはイエシュアがエルサレムの街に告げられた、御自分が再びこの地に、イスラエルの民のもとに戻って来られることについての御言葉に結びつくと考えられます。

【新改訳 2017】

ルカの福音書

13:35 見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。』

イスラエルの民がイエシュアを「主の御名によって来られる方」と認め、この御方を「祝福あれ」と言って呼び求める時にイエシュアは再臨されることが述べられていると考えられます。ですからこのことから「ツアラアトに冒された人」の取った行動が、終わりの日にイエシュアが再臨され、イスラエルの民を集め、御国を建て上げることが「型」として表されていると考えられます。

そしてこの「ツアラアトに冒された人」はイエシュアに懇願して、「お心一つで、私をきよくすることがおできになります。」と言っています。この「お心一つで…」という表現は、もしイエシュアがそれをお望みなら、願われるならそれは必ずなる、という意味であり、イエシュアにはその権威があること、しかもその権威とはただの権威ではない、不可能のない神の権威であることを意味しています。なぜならツアラアトは人の知恵や力では絶対に癒せない、神でなければ、その御力によってでなければ絶対にきよめられないものだったからです。レビ記 14 章には、ツアラアトのきよめについての教えが詳細に記されていますが、これはあくまでもツアラアトの有無を確認、証明するためのものであり、直接的にきよめる効力のあるものではありません。ちなみに旧約聖書の記述において、このツアラアトがきよめられたという事例は少なく、モーセの姉のミリヤム（民数記 12 章）と、アラムの將軍ナアマン（Ⅱ列王記 5 章）のわずか二件のみです。このように人には決して癒せない、そして神がこれをきよめられることも稀という、まさに神が望まなければ、つまり神が人の願いを聞いて行うという類のものではなく、神ご自身が自らそれを望んで行うという、神の御計画を指し示す行為、それがツアラアトをきよめるということに表されていると考えられます。ですからここに記された「ツアラアトに冒された人」とは、旧約聖書の歴史において神に選ばれたアブラハムの子孫であるイスラエルの民が、神を捨て、その御言葉に背き、偶像礼拝を行った結果、神の怒り、のろいによって滅ぼされ、生き残った者たちも世界中に離散させられたという事実を表していると考えられます。そしてこの人が「イエシュアのもとに来ひざまずいて懇願」したという行為と、「お心一つで、私をきよくすることがおできになります。」と言った言葉は、神はこのイスラエルの民を再び集め、国家として再建することをお望みで、そのような御計画があるということが表されていると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:41 イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。

1:42 すると、すぐにツアラアトが消えて、その人はきよくなった。

3. あわれむ

イエシュアはこのツアラアトに冒された人を「深くあわれみ」ました。「あわれむ」とは一般的には同情する、かわいそうに思うということですが、ヘブル語ではラーハム(רחם)と言い、同様に「愛する、あわれむ、思いやる」という意味があります。ではこのラーハムが聖書で最初に使われた箇所から、その本来の意味を考えてみましょう。

【新改訳 2017】

出エジプト記

33:16 私とあなたの民がみこころにかなっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちと一緒にいき、私とあなたの民が地上のすべての民と異なり、特別に扱われることによるのではないのでしょうか。」

33:17 【主】はモーセに言われた。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名指して選び出したのだから。」

33:18 モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」

33:19 主は言われた。「わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、【主】の名であなただの前に宣言する。わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

これは神である主がモーセに告げられた御言葉です。神はモーセを「名指して選び出した」と言われ、その後言われた「わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ」という御言葉の中に聖書で最初のラーハムがあります。ですからラーハムとは本来、神の選び、神がその御心のままに特別にお選びになることを意味していると考えられます。神がモーセを選び出されたのは、ただ楽しく会話をするためではありませんでした。同じく神御自身がお選びになったイスラエルの民を、神の民として教育し、彼らの先祖の地カナンに連れて行かせるためでした。つまり神の御計画のために選ばれ、ラーハム「あわれもうと思」われたのです。このようにラーハムとは本来、神の御計画のゆえの選ぴという意味があると考えられ、そしてそれがイスラエルの民に対するものであると考えられます。ですからイエシュアがツアラウトに冒された人を「深くあわれみ、」という様子は、神がその御計画のゆえにイスラエルの民を特別に選んでおられることを表していると考えられます。

4. 手を伸ばして

そしてイエシュアはこの人をあわれみ、「手を伸ばして…さわり」ました。ツアラウトにさわると、これは当時、絶対にしてはならない、ありえない行為でした。なぜならこの病、汚れにふれた者もまた同様に汚れるとされていたからです。ですからツアラウトになった人は、たとえ王であっても人の社会から追い出され、隔離されました。しかしそんなツアラウトに、イエシュアは「手を伸ばされた」のです。ここで使われているヘブル語はシャーラハ(נָחַץ)「遣わす、広げる、解く、投げ出す」という様々な意味を持った動詞です。この最初の言及も見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

これはエデンの園において、食べてはならないと命じられた善悪の知識の木の実を食べてしまったアダムとエバに対する御言葉です。神の命令に背き、罪を犯した彼らはエデンの園を追い出されることになります。それは「手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないように」するためでした。このように「手を伸ばす」と訳された聖書で最初のシャーラハは「(エデンの園で) 永遠に生きること」を指し示していると考えられます。ですからイエシュアがツアラウトに冒された人に対し

でシャーラハ「手を伸ばした」という行為は、イスラエルの民に永遠のいのちを与え、その国を永遠に栄えさせるという御計画があることを「型」として表していると考えられます。

5. わたしの心

そしてイエシュアは、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われ、このツアラアトの人を癒されました。この「わたしの心だ。」という言葉は、先ほどの「お心一つで」と結びつく表現です。ヘブル語ではどちらもラーツァー(רצף)「喜ぶ、愛する、受け入れる」という意味の動詞が使われていますが、その本来の意味はどうでしょうか。

【新改訳 2017】

創世記

33:8 するとエサウは、「私が出会ったあの一群すべては、いったい何のためのものか」と尋ねた。ヤコブは「あなた様のご好意を得るためのものです」と答えた。

33:9 エサウは、「私には十分ある。弟よ、あなたのものは、あなたのものにしておきなさい」と言った。

33:10 ヤコブは答えた。「いいえ。もしお気に召すなら、どうか私の手から贈り物をお受け取りください。私は兄上のお顔を見て、神の御顔を見ているようです。兄上は私を喜んでくださいましたから。

これはアブラハムの子イサクの子である兄のエサウと弟のヤコブ（イスラエル）が再会する場面です。ヤコブが兄のエサウから長子の祝福を奪ったために、一時はヤコブを殺したいほどに憎んだエサウでしたが、長い年月を経て、兄は弟を赦し、受け入れました。この「兄上は私を喜んでくださいました」と訳されているのが聖書で最初のラーツァーです。ここでヤコブはエサウを見て「神の御顔を見ているよう」だと言っています。ですからラーツァーとは本来、神との和解、神の赦しを指し示し、神とヤコブ、すなわちイスラエルとの関係が回復することを指し示している言葉であると考えられます。イエシュアの言われた「わたしの心だ。」とは、それを指し示し、イエシュアによって神とイスラエルの関係が回復されることが表されていると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:42 すると、すぐにツアラアトが消えて、その人はきよくなった。

6. 消える

イエシュアによって「すぐにツアラアトが消えて」とあります。この「消えて」と訳されているヘブル語はスール(סור)「わきへそれる、離れる」という意味の動詞です。

【新改訳 2017】

創世記

8:13 六百一年目の第一の月の一日に、水は地の上から干上がった。ノアが箱舟の覆いを取り払って眺めると、見よ、地の面は乾いていた。

これはノアの箱舟の出来事の一場面です。全世界を水没させた大洪水が終わり、ノアが箱舟の「(覆いを)取り払う」と訳されている箇所に、聖書で最初のスールが使われています。このようにスールとは本来、まるでドアを開け放つように、覆われていたものが取り除かれて、見えるようになることを意味すると考えられます。ですからイエシュアによってツアラアトが消えたというこの出来事は、現在覆われているイスラエルの民、ユダヤ人たちの目が開かれ、先ほど取り上げたルカ 13:35 について述べたように、イエシュアが「主の名によって来られる方」イスラエルの王となられる神の御子メシアであることを見る、認める、理解するようになることが「型」として表されていると考えられます。

7. きよくなる

そしてツアラアトに冒されていたその人は「きよくなった」とあります。ここにはターヘール(טָהַר)「きよくなる」という動詞が使われています。最初の言及は創世記 35:2 です。

【新改訳 2017】

創世記

35:1 神はヤコブに仰せられた。「立って、ベテルに上り、そこに住みなさい。そしてそこに、あなたが兄エサウから逃れたとき、あなたに現れた神のために祭壇を築きなさい。」

35:2 それで、ヤコブは自分の家族と、自分と一緒にいるすべての者に言った。「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、身をきよめ、衣を着替えなさい。」

35:3 私たちは立って、ベテルに上って行こう。私はそこに、苦難の日に私に答え、私が歩んだ道でもにいてくださった神に、祭壇を築こう。」

35:4 彼らは、手にしていたすべての異国の神々と、耳につけていた耳輪をヤコブに渡した。ヤコブはそれらを、シェケムの近くにある榿の木の下に埋めた。

これは神がヤコブ（イスラエル）に仰せられた御言葉です。ここで「身をきよめ」と訳されているのが聖書で最初のターヘールです。ヤコブとその家族が「身をきよめ」なければならなかった理由は、「ベテルに上り、そこに住む」ためでした。「ベテル」とはヘブル語で「神の家、神の国」という意味です。このようにターヘールとは本来、ヤコブすなわちイスラエルとその子孫が「神の国」に住むことを指し示していると考えられます。ですから「お心一つ」また「わたしの心」とは、「神の国」にイスラエルの民が住むという、神の望み、願い、神の御計画であるということがこの「ツアラアトに冒された人」に起こった出来事の中に「型」として、たとえ話のように表されていると考えられます。

このように、この天地宇宙とそこにあるすべての生命を創造された神の目はつねにアブラハムの子孫であるイスラエルの民に注がれており、彼らに対して成し遂げられる、果たされるのが神の御計画であると考えられます。ですからイスラエルにとって異邦人である私たちが、神の御計画の中に入れられるためにはこのイスラエルに対する神の選びを認め、彼らを祝福する以外にはありません。なぜなら神はイスラエルに対してこのように仰せられたからです。

【新改訳 2017】

創世記

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。

「地のすべての部族」すなわち私たち人類はみな、イスラエルによって祝福されると神は仰せられました。これが私たち人類に与えられた、神の唯一の祝福です。ですから私たちは日本人であっても何人であっても、このイスラエルに目を留めなければならないのです。それは聖書という書物が最初ヘブル語で書かれ、イスラエルの民であるユダヤ人たちによって書かれた、イスラエルの歴史を中心、土台として記された書物であるという事実からも言うことができます。どうか神が私たちのイスラエルに対する理解をますます深めさせていただきますように。